

基礎経済科学研究所 自由大学院

大阪第三学科(金融流通協同組合論ゼミ)からのたより

[第878回ゼミ報告] 2024年4月19日号

春の初め、ゼミ恒例の遠足、今年是最小の3名の参加者。桜が満開となった大川(旧淀川)の堤を、桜ノ宮から淀屋橋まで語り合いながらの散策。

4月10日のゼミは、斎藤幸平『マルクス解体』の「はじめに」と第1章「物質代謝論と環境破壊」を小野さんの報告で行いました。人類は制御できない科学技術を発展させ人類史を終わりに迎えようとしている。マルクス主義の再生には史的唯物論という生産力・生産関係の矛盾の歴史観に依拠するマルクス像を解体することだ。環境の領域こそ人新世でのマルクスの知的遺産を再生させる中心領域となり「物質代謝の亀裂」に現代資本主義での環境問題への批判に不可欠の概念となる。マルクスの環境思想が無視されたのは彼の経済学批判が未完であったことによる。ローザ・ルクセンブルクが問題にした資本の限界・物質概念でグローバルな不等価交換を分析し、さらに環境問題に大きく貢献したのは1970年代初頭のメサーロシュである。物質代謝の第1階層が自然的・生態学的過程で根源的な関係性、第2階層が社会的・歴史過程で資本主義の拡張へ。物質代謝の第1の亀裂は自然の循環過程の攪乱、第2の亀裂は空間的・都市と農村の対立、第3の亀裂は時間的亀裂で、物質代謝の転嫁も技術・空間・時間的であり気候危機は可変的でもある。

討論では、この本の原題は、「Marx in Anthropocene: Toward the Idea of Degrowth Communism」、訳せば、「人新世におけるマルクス—脱成長コミュニズムの考察に向けて」となるでしょうか、別の本で「人新世」を使っているのです、日本語版では避けた本題となったのか。それでも「マルクス解体」とは、いわゆる生産力主義・史的唯物論・スターリン主義、これの解体ではないか、仏・伊の党はソ連追随、マルクス主義者は自然・環境を論じないと。日本では1960年代から四日市での公害を取り上げ問題にし、環境問題として経済学で早くから論じてきた歴史がある。

会場参加は小野さん・川口さん・高田、オンライン参加は斎藤さん、竹内さん・後藤さん・井貝さんの7名でした。

* 4月24日(第4週)ゼミも、午後5時半(or 45分)から8時です。

・オンライン情報 Zoom: ID: 813 5234 3222 パスコード: 341938

* 第4週ゼミでの『帝国主義論』の次の候補に、佐々木隆治『資本論第3巻』、隅田聡一郎『国家に抗するマルクス「政治の他律性」について』が上がっています。それ以外に候補本があれば、推薦願います。

***** ゼミ日程 *****

4月24日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋

レーニン『帝国主義論』8.寄生性・腐朽・9.批判・報告後藤さん

5月8日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋

斎藤幸平『マルクス解体』第2章 M/Eの環境思想 報告小野さん

5月22日(水)午後5時半～8時 堺筋本町瓦町・アイクルの部屋

レーニン『帝国主義論』10. 帝国主義の歴史的地位 報告者未定

その後 6/12, 6/26, 7/10, 7/24 [アイクルの部屋]

◇第三学科事務局/高田好章: ytakada@kcn.ne.jp 090-8658-3755

HomePage: <http://ysweb.g.dgdg.jp/ytakada/kisoken/> Pass: kiso